

◆東京藝術大学特別講座（D00R） 第1回目

演題	生命体としての病院「つながり」を生むホリスティックなアートの力
講師	森 合音（もり あいね）氏 四国こどもとおとなの医療センターアートディレクター、 NP0 アーツプロジェクト代表、アートミーツケア学会共同代表、 宝塚大学看護学部客員准教授、猪熊弦一郎現代美術館理事 2005 年 富士フォトサロン新人賞受賞 写真家として活動 2009 年 独立行政法人国立病院機構香川小児病院での壁画制作をきっかけにアートディレクターとして同病院勤務。 2012 年 四国こどもとおとなの医療センター建設時、病院全体のアートディレクションを担当。現在アートディレクターとして同病院勤務。
講義の概要	私は自身の体験から「痛み」のあるところにこそアートが息づくと思っています。病院には日々たくさんの「痛み」が生まれます。これまで当院で導入されてきたのは「作品」という完成されたアートではありません。アートの役割は院内にある「痛み」を創造力と循環によって回復させること。つまり長期的な視点で取り組む問題解決であり、医療者も患者もクリエイターも共に、対話を通じて知恵を出し合い「新しい病院」を作る、終わることない全員参加型の病院づくりです。人の痛みに寄り添う「病院」という場所にこそ「つながり」に気づき、新たな「つながり」を生み出し続けるホリスティックなアートの力が必要だと思っています。

◆◆受講後の学生の感想◆◆

1年 ①

患者だけでなく医療スタッフも心の中に「痛み」を抱えていて、それを改善したいという（潜在的）ニーズを持っている。芸術を介してそれらを表現したりイセ者と対話したり、何らかの表現に触れたりすることで、それぞれの内側から癒し（生命力・感謝）がにじみ出てくるという点が興味深かった。痛みから目をそらさずに向き合ってみようとする先に救いがあるという所に共感した。痛みは改善への希望である（自然、生命の努力のあらわれ）というナイチンゲールの言葉がここでも出てくるのだなと、偉大さを感じた。精神科の患者の例を聞いて、アートという娯楽に近い活動であっても患者によっては症状を悪化させも癒しもするのだということを再認識し身が引きしまった。

1年 ②

私は今日この講義を受けて「芸術・アートと医療は何の関わりもない」というイメージが「芸術・アートは病院には欠かせないもの」というイメージに変わりました。アートは、対話を通じて患者さんや医療スタッフの見えない想いを形にするということを知りました。

特に心に残っているのは、霊安室への通路アートです。言葉のかわりに祈りを込めて描いてあって、死は終わりじゃなく、命は循環しているということに気付きました。苦しい思いをしているのは患者さんだけでなく、その患者さんに携わった医療スタッフも同じ思いを持っているということを知りました。これから看護師になるにあたって、病気だけを見るのではなく、しっかり観察しその過程でみる想像力・立体的な視点をプラスして患者に寄り添っていきたいです。また、看護するということは、ケアするだけでなく、環境づくりも看護の一つだと思うので、自然治癒力が最大限に活かされる環境づくりを私もしていきたいと思いました。

2年 ①

今回の講義を聞いて「対話」を通じて患者さんや医療スタッフの见えない想いを形にするという言葉が印象的でした。アートは「対話」で伝えられない想いを表現することができると分かり、医療のアートの結びつきが分かりました。病棟等にかかえている絵には、絵を通して患者の気持ちに寄り添うというような意味も込められているのだと感じました。また、医療スタッフ達が壁に絵を描いた話では、アートが心のケアに役立っていることが分かりました。言葉では癒すことができない「痛み」をアートが和らげてくれるため、アートを取り入れた取り組みがもっと増えていけたらいいなと思いました。

2年 ②

病院におけるアート活動は、今学習している看護との共通点があると話を聞いて思った。それは、相手のニーズを大切にすることと、対話(コミュニケーション)をすることである。この2つは、看護を提供するにあたって、とても重要な部分であるため、自分の技術として身に付けていきたい。また、循環論を初めて聞き、物事を考えていくうえでの一つの概念として考えることで、色々な視点で考察することができると考えた。病院にアートを加えることで、痛みを表現できたり、想像力を持つことができたりすることができることを学習し、興味を持った。もっとアートを身近に感じ、実際に行く際に、着目して施設内を見学したいと思った。